



## 新しい展開に向けて

大塚 寛治\*

半導体業界第一人者であられた牧本次生前会長の後を引き継ぎ、会長に就任し1年を経過した。努力したつもりであるが、会員にはまだまだ不十分なものと思われていると認識している。喜ばしいことは、会員数が定常的に増加し、3000人（2006年3月現在の一般会員＋学生会員）を超えたことである。それだけ実装（Jisso）に対する認識が高まっているとともに重要度が増していることである。この環境にあって身の引き締まる思いを新たにしている。

残念ながら今まで日本の先進的実装技術の基盤的産業であった日本の半導体産業があまり思わしくない状況である。このときこそ日本の先進的実装技術がそれを下支えして、日本の半導体産業を世界に輝かせる必要があると思われるが、その環境までは至っていない。一方において半導体産業はカーエレクトロニクスに展開しつつあり、ハイブリッドカーにいたってはエレクトロニクスが占めるコストは全コストの半分にも達するという。しかも半導体の1台あたりの使用量はパソコンの8倍のチップ面積であるといわれているため、一大マーケットとなる。カーエレクトロニクスは航空機エレクトロニクスと同様人命にかかわる機器であり、厳しい環境にも耐えなければならない。きめ細かなサービスと信頼度で日本の自動車産業は今や世界一まで発展している。信頼度を極限まで高める技術こそ、日本のお家芸である。実装技術はカーエレクトロニクス機器の信頼度向上の担い手であり、日本が先導できる環境が整っている。当学会は実装にかかわる信頼度技術向上に関して今後指導的立場にいないといけない。特に若い技術者や中小企業の技術者のガイドが必要と痛感している。

NHKスペシャルの番組「地球シミュレータ」を見ればおわかりのように、20年以内に石油離脱を図らなければならないという差し迫った状況にある。パワーエレクトロニクスや太陽電池の効率化、照明の半導体化などを図らなければならない。今まで実装技術は電子回路用の機器に顔を向けていたが、これらの業界にも目を向ける必要がある。今回学会をよりよくするため、会員にアンケートにお答えいただいたが、この分野の方たちが不満を述べられていることが判明した。私はエレクトロニクス実装学会の発足時理事として担当していて、光通信技術部門も取り込むという姿勢で積極的に関係者を招聘して、今日のこの部門がゆるぎないものとなっているように、上記3部門の方々のエレクトロニクス実装学会への積極的な参加を促し、新しく、大きなニーズに応えたいと考えている。この部門は大電流、高圧、高出力、サイズが大型という従来追い求めていた軽薄短小と趣を異にするが、カーエレクトロニクスの信頼度向上の追求は結果としてこの分野の大型化にも適用可能な普遍的技術であると確信している。

テクノロジドライブが混沌としているとき、すなわち今はHow to makeが支配するときである。過去から日本が強かった実装技術の真髄はHow to makeであったと思っている。今こそ足を着実に地に付けるための工学的深さを高めるときである。今のエレクトロニクス実装学会に課せられた課題であると肝に銘じたい。